

志田信男先生を偲んで

浮田 三郎

広島大学名誉教授

今年は、色々な分野で訃報を聞くことができました。ことギリシャ語・文学関係でも大御所のご逝去がありました。私は、ここに志田信男先生を偲んで、思い出をしたためたいと思います。

私が志田先生と交わした会話の思い出の中で印象的だったのは茸の話です。ある年の研究発表会が終わり、故関本至先生を囲んで皆さんが雑談をされているときに、ふと耳にした茸の話題です。志田先生は発表会の始まるまえ、朝のうちに広島城を見学がてら散歩してきたそうです。城の周りで採取したたくさんの茸のなかに食べられるものが結構あったとのことでした。私も故郷（現在の安芸高田市、松茸を産することで有名）の里山でよく茸狩りをしましたが、そのたびに、どれが食べられるのかと迷ったものです。そんなことからつい聞き耳を立てていました。ギリシャ研究とは直接、関係ないようにみえる茸の話ですが、先生にぐっと親しさを感じるようになりました。

先生は食と健康をテーマにしたさまざまな文献を取り上げ、その中の詩や諺に関する研究（季刊『伝承と医学』）を送ってくださるようになりました。ちょうど私はギリシャと日本の諺の対照比較研究をしていましたので、その素材の背景となっている物のとらえ方を私の研究の参考にさせてもらおうと思っていました。ただ、それが十分にできなかったのが今も残念です。

私には先生に直接、伺いたいと思っていたことがあります。それは私の十八番、セフェリスの *Αρνηση* のなかの一節についてです。

Πάνω στην άμμο την ξανθή
γράφαμε τ'ὄνομά της·
ώραῖα πού φύσηξεν ὁ μπάτης
καὶ σβήστηκε ἡ γραφή.

黄金の砂の上に
ぼくらは彼女の名前を書いた
だが海の微風が吹いて
文字は消えてしまった

テオドラキスが曲をつけた *Αρνήση* は私がギリシャに留学した時に周りの若者にも人気で、バス旅行のときなどで皆がよく歌ったりしていました。ただ日本語に訳せてもよくわからないところがありました。それは *τ'ὄνομά της* の *της* が何を指しているのかということです。何人かのギリシャ人やギリシャ語を研究している友にも尋ねてみましたが、なかなか納得のいく答えを得ることができないまま、私も歌っていました。いつか先生にお会いしたときにお尋ねしてみようと思っていたのですが、これも叶わぬままになってしまいました。

今の『プロピレア』の盛況ぶりからは想像ができないかもしれませんが、編集委員の奮闘にもかかわらず、『プロピレア』に原稿が集まらなくなった時期がありました。このころ先生からもらった年賀状にはよく「どうした広島（学会の活動）、元気がないぞ、もっとがんばれ」という叱咤激励が添えられていました。それを読むたびに身の引き締まる思いで新年を迎えていました。こうした状況は二～三年続きましたが、その後は執筆者も増え定期的に発行できるようになりました。まるで「元気をだせ」という先生の励ましが功を奏したかのようです。

思いはつきませんが、そちらでは関本先生や中井先生がたと楽しくギリシャ語や文学の話に花を咲かせておられることでしょう。どうぞ、そちらからも私たちのことを見守ってくださいますよう願います。

【*Αρνήση* の日本語訳：志田信男訳『セフェリス詩集』「拒否」より】